

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 9 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520138

研究課題名（和文） 包括的な文化理解に基づく彫刻文化財修復論の措定研究

研究課題名（英文）

Propositional Research on Cultural Property Restoration and Conservation Theory of Sculptures based on Comprehensive Cultural Understanding

研究代表者

秋田 孝弘（AKITA TAKAHIRO）

立正大学・仏教学部・教授

研究者番号：50287918

研究成果の概要（和文）：

本研究の趣旨に基づいた研究会およびシンポジウムを複数開催した結果、美術性・歴史性・宗教性などの多様な観点を踏まえて行われる修復家の判断が、文化財修復としての妥当性をもつためには、複雑に絡み合う諸要素を包括的に統御する視座を持つ必要があることが浮き彫りになった。それは、「文化」に対してより適正かつ公平な眼をもつための要件であるとともに、「修復論」構築に必須な土台であることを確認し、次の目的への指針となった。

研究成果の概要（英文）：

From numbers of discussion meetings and symposiums, it became clear that comprehensive understanding of complicatedly related cultural background, such as art, history, and religion, are necessary for appropriate decision making of the conservator. The goal of this guiding principle is to construct cultural property restoration theory from proper cultural understanding without prejudice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術・文化政策

### 1. 研究開始当初の背景

文化財修復は多岐にわたる文化的領域の問題を含むため、修復者には文化に対する深い理解が求められる。文化とは様々な性質の人間の営みを包括する概念で、その多義性は修復における判断の難しさに反映するが、これに対する本質的な議論は、ケースバイケースの演繹性の陰で置き去りにされているのが実状である。修復者が文化の多義性について問題意識を持たなければ、偏った解釈による措置が無自覚に行われる可能性の回避は不可能であり、また、そのような措置が文化財修復の名の下に行われるところに看過できない現実がある。現時点で「文化財保護法」の基本理念を、実際の作業内容に反映させるために、指針として修復関係者が共有できる修復論が存在しない。指定物件の資料を扱う修復者の間においても、修復の機軸となる理念と理論を厳密には共有していない。この状況は非常に憂慮すべきことである。

### 2. 研究の目的

本研究は、現時点における文化財修復（彫刻）に関する課題を抽出し、それが現象化していく経緯と要因についての検討作業をおして、第一義的に文化財修復活動の創造的展開を企図する。とくに芸術作品における美の特質に関しては、その性格の復元不可能性ゆえに、維持に際する多くの課題があり、本研究の焦点のひとつである。

目的を遂行するため、彫刻芸術の「真正性（authenticity）」について深く究明すると共に、文化財概念の再検討が必要不可欠であり、結果として、現代における彫刻芸術の存在意義と、文化財に関わるすべての活動の可能性が浮き彫りになることが期待される。その上で「修復」のあり方について総合的な検討作業を行いながら、「理念」を再確認しつつ各措置を構造的に関係付けて、最終的には文化財修復論（彫刻）の構築を目指す。

「歴史的記念物」から「文化財」へと新しい概念が形成されてきた流れは、その社会がかつてつくりあげた価値や意味体系に対して、あらためて眼を向けて尊重する動きの現れであり、古い価値観の破壊＝進展という近代化の方向性への反動として生まれたために、もともと多くの矛盾を孕んでいる。この「矛盾」は目的論的歴史観によって捨て去られつつある大切な何かに対する身体的なレベルでの反動で必然的に生じているものと考えられる。したがって「文化財」に関わるすべての活動は、この「矛盾に向き合う」と

いう行為の中にこそ最も重要な意義があり、そこから未来への多くの示唆を得る。

この視点に立つならば、修復者は矛盾を懐に抱えながら、各修復において資料の物質的存続、美的特質や歴史性の保持、鑑賞上の違和感の緩和などそれぞれ異なる要求に対して応える道を探り、それを編集的に統括すべきものと考えられる。

また、これまでの日本の修復は「矛盾に向き合う」と言える程の哲学を持ってはいなかった。なぜ成熟しなかったかという事情についても検討を加えながら、本質的な「矛盾」に最も接近している立場（修復者）から、修復の現場といういわば臨床に生かされることを目的として、常に対象との対話から答えを導き出すための指針として、理念と措置を構造的に関係付けることを試みる。

### 3. 研究の方法

研究代表者と研究協力者間の考察と議論の中から、彫刻文化財修復に関する問題を浮き彫りにし、それぞれについて素案を文章化する。また、外部の修復関連研究教育機関や修復者に呼びかけて課題を絞り込んだ研究会を継続的に開催、課題に対する素案を提示し問題意識を共有した上で議論を交わす。さらに、議論から見出された問題の所在を明らかにして考察を深め、最終的には修復者が指針とすべき「修復論」としてまとめることを目指す。

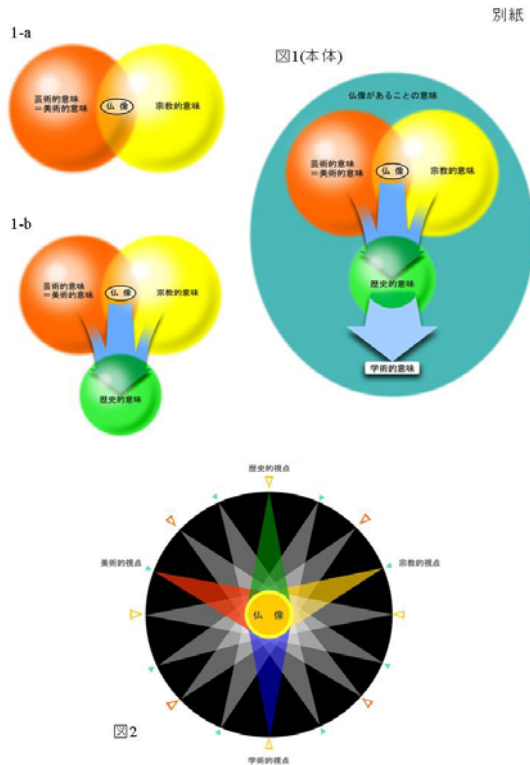
本研究はおおむね2つの観点を平行して行う。

- (1) 総論としての文化理解論（文化財概念の再構築を含む）に基づいた修復における哲学と倫理を考察する。これは修復対象となる彫刻芸術についての「存在学」が前提となるために、これも同時並行的に進める。
- (2) 各論としての各措置における目的意識の明確化—何を、どのように、どの程度—についてと、適正評価についての方法論的考察を行う。

### 4. 研究成果

- (1) 当研究の前提研究となっている内容を振り返り、あらためて整理する作業を行った。平成17年(2005)～平成19年(2007)までの研究成果（「彫刻修復の基本原則についての提案」・「彫刻修復における補彩について—文化財修復論構築の試み—」・「木造日蓮聖人坐像修復報告—補彩における鑑賞上ダメージ緩和の可能性—」・「彫刻修復における「現状維持」という表現について」）を冊子化し（冊

子タイトル『彫刻文化財のための修復論構築に関する考察』、文化財保存の関係機関や工房に配布した。批判を含めて、文化財保存に関する議論を活性化させる材料を提供した。



「彫刻修復の基本原則についての提案」資料

(2) 複数の研究会・講演会を催した。最初の取り組みとして、文化財という考え方の発祥と展開を確認するとともに、それに伴う修復が辿った経緯とその必然性を把握するため、西洋と日本のそれぞれについて修復史に関する研究会を行った(①②)。また彫刻という芸術の造形的特質を確認するところから、修復のあり方を模索する試みとして「彫刻論」をテーマとする研究会を行った(③)。

①第1回講演会：「木製彫刻文化財を中心としたイタリアにおける保存修復について」岡田靖/(財)文化財保護・芸術研究助成財団 在外研修員(平成20年度開催)

②第2回講演会：「仏像彫刻の保存の歴史—明治期を中心として—」本郷孝衣/立正大学仏教文化財修復研究・実習室特別研究員(平成20年度開催)

③第3回講演会：『彫刻文化財修復論』のための『彫刻論』について」伊加利庄平/立正大学仏教文化財修復研究・非常勤講師(平成21年度開催)

(3) 「真正性「authenticity）」について、世界遺産(建築)の取り組みを素材とした意見交換研究会を行った。

①研究会：「建築物と彫刻が抱える問題点の比較」特別講師＝ウーゴ ミズコ/学習院女子大学大学院/国際文化交流研究科/准教授、他研究代表者および研究協力者が参加(平成22年度開催)

(4) 本研究の締めくくりとして彫刻修復のシンポジウムを開催し、修復の専門家ばかりでなく、さまざまな立場で彫刻修復に関係する方々が意見交換を行う場を提供した。(平成23年7月開催)

①公開シンポジウム基調講演：「私たちは何をしているのか」秋田孝弘(貴廣)/研究代表者

②公開シンポジウムパネルディスカッション：「修復者のアイデンティティー—仏像彫刻の場合—」パネリスト＝伊加利庄平/立正大学仏教文化財修復研究・非常勤講師、寺尾英智/立正大学仏教文化財修復研究・教授、藤岡穰/大阪大学大学院文学研究科・教授、牧野隆夫/吉備文化財修復所・代表、司会＝秋田孝弘(貴廣)/研究代表者

(5) 研究期間中の成果内容をまとめて冊子化し、文化財保存の関係機関や工房に配布した。：冊子タイトル『包括的な文化理解に基づく彫刻文化財修復論の措定研究 研究成果報告書』

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①秋田孝弘(貴廣)・伊加利庄平、「彫刻修復の基本原則についての提案—仏像を主な対象として—」、大崎学報、査読有、166号、2010、21～43

〔学会発表〕(計4件)

①文化財修復学会第30回大会(2008)

◆ポスター発表「彫刻修復における「修復論」構築の意義と見通し—現段階での総括—」立正大学仏教文化財修復研究・実習室＝秋田孝弘(貴廣)・伊加利庄平・野坂知世・笹岡直美/(財)文化財保護・芸術研究助成財団 在外研修員＝岡田靖

②第62回 日蓮宗教学研究発表大会

◆口頭発表「日蓮宗寺院における特殊な釈迦如来立像に関する一考察—胸の記号と掌に法輪を有する像—」秋田孝弘(貴廣)

③第62回 日蓮宗教学研究発表大会

◆口頭発表「千葉県藻原寺所蔵 山門安置釈迦如来立像の修復に関する報告」＝笹岡直美

④文化財修復学会第32回大会(2010)

◆ポスター発表「彫刻修復における量的補填措置が美術性に及ぼす影響」立正大学仏教文化財修復研究・実習室＝秋田孝弘(貴廣)・伊加利庄平・野坂知世・笹岡直美/東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター＝岡田靖

[図書](計1件)

①秋田孝弘(貴廣)編・立正大学仏教学部監修、丸善プラネット株式会社、「文化財保存学入門」、2012、292

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋田 孝弘 (AKITA TAKAHIRO)  
立正大学・仏教学部・教授  
研究者番号：50287918

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 研究協力者

伊加利 庄平 (IKARI SYOHEI)  
立正大学・仏教学部・非常勤講師  
研究者番号：60586981

岡田 靖 (OKADA YASUSHI)  
東北芸術工科大学・  
文化財保存修復研究センター・  
専任講師・研究員  
研究者番号：40401509

本郷 孝衣 (HONGO TAKAE)  
立正大学・  
仏教文化財修復研究・実習室・特別研究員  
研究者番号：

笹岡 直美 (SASAOKA NAOMI)  
立正大学・仏教学部・非常勤講師  
研究者番号：90586984

野坂 知世 (NOSAKA TOMOYO)  
立正大学・仏教学部・非常勤講師  
研究者番号：80586983

田川 新一朗 (TAGAWA SHINICHIRO)  
箭上文化財修復・代表  
研究者番号：